

2011 年度 立命館学校教育研究会 講演会

2011 年 6 月 12 日（日）立命館学校教育研究会 講演会のご報告



立命館学校教育研究会 講演会のご報告



教育を「江戸」から考える-人間を育てる教育・教師のあり方-

立命館学校教育研究会 講演会のご報告

教育を「江戸」から考える-人間を育てる教育・教師のあり方-

2011 年 6 月 12 日（日）、2011 年度立命館大学学校教育研究会「講演会」が開催されました。辻本雅史先生（京都大学大学院教育学研究科長、同教授）を講演に招き、「教育を「江戸」から考える-一人間を育てる教育・教師のあり方」と題した講演をしていただきました。衣笠キャンパスの創思館カンファレンスルームでは、約 100 人の参加者が、辻本先生の講演に聴き入りました。また、講演会後の懇親会では、約 50 人の参加者があり、校友の教員・教育関係者、本学の学生・教職員が交流を持ちました。

辻本先生は、われわれは「タイムマシン」で江戸時代に行くことができる、とおっしゃいました。すなわち、資料という「タイムマシン」に乗ることによって、江戸時代に移動できるということを指摘され、実際に、多くの江戸時代の資料をスライドで提示され、解説されるとともに、現物資料をフロアにも回覧していただきました。

江戸時代の寺子屋では、「手本」の模倣と習熟がめざされ、一斉授業ではなく、個別指導と自己学習が基本であり、いわば、身体活動が行われていました。また、藩校や学問塾における学問の学習でも、テキストの身体化ということがめざされていました。ここから、先生は「学びの身体性」ということを指摘され、また、近代学校のような「教え込み」をする者と

しての教師ではなく、「滲み込み」のモデルとしての教師、というあり方について話されました。

江戸時代の教育を通して、現在の日本の学校教育をみると、自明だと思っていたことが必ずしもそうではないことに気付かされたり、また、現行と違ったあり方の可能性に気付かされたりします。また、意外と江戸時代から連続している学習文化が、現代の日本にも浸透していることにも気付きます。

フロアからは、江戸時代の教育に関して様々な質問があり、先生に詳しくお答えいただきました。

文責：神藤 貴昭<立命館学校教育研究会運営委員>